

近衛兵の北支の戦闘

福岡県 北 口 市 次

現役除隊後は両親のもとで農業、田、果樹園の作業の手伝いをしていました。昭和十八（一九四三）年四月から二川小学校の青年学校の指導員を勤めました。

昭和十八年十二月二十五、六日ころ召集令状が参りました。入隊日は一月四日でした。早速近隣の親戚、知己への挨拶廻りや、応召準備に慌たしい毎日でした。満州に入隊していた弟が亡くなり、遺骨も帰って来ましたが、その町葬を待たず応召致しました。

一月四日早朝、村の鎮守の神前で部落の方々に別れの挨拶を申し上げ、決意を新たにして我が村を出立しました。鹿児島本線渡瀬駅まで一里足らずを旗と幟を先頭に部落の人達の軍歌と万歳に

送られ、歓呼の声に感謝しながら車中の人となりました。

久留米歩兵第四十八連隊に到着と同時に、北支派遣第六七九五部隊江原隊に編入されて、高良台の八女忠霊塔近くの廠舎に宿泊しました。二月十二日、久留米荒木駅からの出発までには浮き袋代用の竹筒作りなどいたしました。敵潜水艦攻撃に備えた物でしょう。後日、竹筒は各自持参して乗船しました。

二月十四日、門司港出航、貨物船改造の段々ベッドの御用船でした。十五日釜山着、客車で十七日鮮満国境を、十九日満支国境を通過して、三月一日山西省和順県和順市に到着しました。大原への途中の都市です。即日同地区の警備に当たりました。小銃等の火器はここで支給されました。

和順市は城壁に囲まれた城塞都市と思われ、また。部隊は四個中隊編成で和順市内には、和田中隊が駐屯し、私達江原中隊は大隊本部と共に、約二キロ離れたクッソンに駐屯しました。クッソン

は小さな町で、城壁などはありませんでしたが大隊長はここにおられました。他の中隊はクッソンから五里余り離れた昔陽（セキヨウ）に一個中隊、もう一つの中隊の駐屯地は覚えていません。

五月二十五日から六月二十一日まで、第一次、第二次の遼東付近の八路軍の討伐作戦に参加致しました。和順には一、二度、夜襲がありました。が、クッソンには一度もありませんでした。

一度、昔陽の分遣隊が八路軍の襲撃を受けたので救援に行きました。分遣隊まで約三里、さらに山から山を索敵行を続けましたが遂に敵の影を見る事ができませんでした。何度も敵が来たと言うので急いで駆けつけると、相手は風を食らって逃げていて、山の中を敵を求めて苦労しましたが一度も遭遇しませんでした。敵は少し離れた安全な所において、側には来ないで、油断したら襲撃するようなことでした。

夜になると出てきて、電話線を切ったり、道路

を破壊する等で、電話線の警備と補修、通信の確保は最も重要な任務でした。

山西省の冬は寒気が厳しくて、到着して直ぐクッソンから約二キロ、さらに上がった山東山の分遣隊に八人で警備に付きましました。分遣の期間は概ね一カ月です。夜歩哨が寒暖計を見て、零下二度ですと驚いて報告しました。

皆驚きましたが大陸の山西省の冬の寒さは、この位が普通だと後で分かりました。空気が乾燥しているせい、そんなに酷い寒さとは感じませんでした。内地と全然感覚が違って、零下十度の晴れた日は暖かいなあという感じですよ。

江原隊の分遣個所は三カ所で、山東山、弓家口（キウカウ）、今一カ所は名前を忘れました。私は四度分遣隊の勤務に付きましたが、一カ月毎に上番、下番と交代勤務でした。

夏は蚊帳を吊った記憶がありますので蚊は沢山いたように思われます。水は夏は川が流れていましたので川の水を使い、冬は川が枯れますので井

戸の水を使用していました。川床を掘れば水が出たので住民も水には不自由はしなかったようでした。

冬は大変な寒さでしたが、暖房は薪でなくすべて石炭でした。山にはほとんど木が無く、所々に小さな松の木がポツンポツンと生えているぐらいです。

石炭は豊富、無尽蔵の有様で、山が黒く濡れたように見えるのは全部石炭だといっていました。露出していて、あちらこちらで露天掘りで、腕木を組んで簡単に釣瓶で水を汲み上げる格好で石炭を引き上げていました。大きな事業所は何十メートルも深く掘っている所もあったようでした。

ここでは、どこの家でも夏冬を通じて石炭を使っていました。家の中の上がり口の床の下に穴を掘って、赤土と石炭を混ぜたものをその穴に入れて、手前から先の広がった金の棒でさらに奥の方に押し込んで、上に穴を開けておいて火を点けると、年中火が消えずオンドルのようなもので

しょうか、炊事場も竈もそうでした。直ぐ側に赤土が置いてあり、燃えたら次々に石炭と一緒に補充して年中火は消さないようにしてありました。燃えた灰は出口の下から掻き落とします。

家は皆煉瓦積みでした。燃料の石炭はどこにも有りませんから全部焼いた煉瓦で積み上げてありました。冬、外から帰って来ても家の中は暖かいのです。

農家の作物は、麦、玉蜀黍^{トウモロコシ}、馬鈴薯^{パレイシヨ}、大豆、粟等が栽培されていましたが大豆、玉蜀黍が特にかかったようです。

家畜は牛と山羊が多く、馬はほとんど見掛けませんでした。農耕用と搾乳、食用でしょう。山羊は大変多かったが、お年寄りと子供達が毎朝部落中の山羊を追い出して山の上に連れて行きます。夕方また山から追って帰って来ますが、山羊はそれぞれ自分の家に帰るようで、山羊は分かるのかと聞いたら、独りでよかですよ自分の家に帰りますからと答えました。山への往復の途中では、両

側の麦畑の麦など食べながら行きますが、誰も気にしません。本当に大らかなものです。

長期間駐留していると住民とも仲良しになります。欲しい物あれば頼むと直ぐ持って来てくれます。勿論代金は支払います。優しくすればいつまでも良い関係が続きます。大隊本部からもその点、嚴重な注意がありました。

分遣隊に勤務中は、担当の部落から毎日報告が来ます。今日は無事でしたとか、誰が来たとかですが、時々は何かあげました。お菓子はあちらには無かったので大変喜ばれました。やはり人情で、進んで種々な情報を集めて来てくれました。

住民は日本軍がいてくれると安心して仕事ができると喜んで、大変友好的でした。時に八路軍が出てきてパチパチ撃つて来ますので警備は少しもおろそかにしませんでした。こちらが見えない所で銃撃してパツと消えます。

和順駐留時代は討伐と分遣隊勤務に明け暮れて、一カ月の勤務と一カ月の部隊での休養の繰り返

返して、古参上等兵は時に分遣隊長勤務もあるのでなかなか大変でした。

和順への外出も一度だけ城門を潜り市内に行きましたが、物も少なく買物も思うようにできませんでした。

部隊の給与、食糧は米がほとんどなくて、一日一食が米で、後は麦等雑穀が多くても、毎日腹いっぱい食べられて空腹を覚えたことは一回もありませんでした。

昭和二十年四月一日、新編成部隊に転属のため、和順を出発、八日山東省濰（イ）県坊子市に到着、五月十五日、至敵第一五七三一部隊松田隊に編入されました。直ちに同地域の警備に当たりました。鉄道線路、道路、通信の沿線警備が主な任務でした。

敵はここでも八路軍で警備の隙を衝いては出没するので広範囲の警備はなかなか大変でした。敵が出たとの報で急いで駆けつけると、藻抜きの殻は山西省の時と同様でした。

和順は城壁に囲まれた立派な市街でしたが、坊子は田舎の村落で囲いも何も無い所で、現地人の家に分宿していました。大隊本部も一緒でしたが、同様に事務所もあっちこっちに分かれて、皆バラバラでした。昭和二十年六月一日、陸軍伍長に任命され、いよいよ責任が重くなったことを痛感致しました。坊子での給与（食糧事情）はやはり和順と同じように米は一食、他は雑穀まじりでしたが、充分にありました。

昭和二十年八月十五日、終戦の詔勅が下り戦争が終結致しました。敵中での終戦の詔勅に、一時呆然自失致しましたが、軍規厳正、一糸乱れず待機致しました。停戦協定が結ばれ、その結果、部隊は蒋介石の国府軍に属する事になり、その要請を受けて、引き続き坊子付近の警備をすることになりました。

今回は国府軍と一緒に、任務は前と同じく鉄道線路、道路、通信の警備補修です。「昨日の敵は

今日の友」と不思議な気持ちです。

分遣隊と一緒に警備している時、共同の敵は八路军です。その八路军の襲撃がありました。今まで一緒にいた国府軍の兵隊はバツと消えて一人もいなくなっていました。終わると何事も無かったように全員揃います。

後年米英の支援を受けながら、国府軍を率いた蔣総統が毛沢東の共産軍に追われて台湾に逃げた訳もこんなところにあるでしょうか。

終戦の詔勅の直後、度々坊子の駐屯地に、敵軍が武器と糧秣を強奪に來ました。その都度これを迎えて、銃を執つての本當の撃ち合いで戦闘になりました。

ようやく二十年十月二十一日、滝（イ）県南流に移り、同地付近の警備、昭和二十一年一月に内地帰還のため、再度坊子に集結、二十二日坊子を出発するまで、銃を手に戦った訳であります。

二月二日夢に見た待ちに待った内地帰還のため、青島港を船出致しました。

想えば苦勞の連続でした。命を掛けた山東の山々を、今は懐かしく見返りながら帰って参りました。佐世保港で下船し、久しぶりに故国の土を踏みました。手続きを終えるなり佐世保―佐賀―鳥栖で鹿児島本線に乗換え、鳥栖―羽犬塚駅では思いも掛けず八女高校から下校する弟（現高田町長）と一緒に乗り合わせ、奇遇を喜びながら二年半ぶりに渡瀬駅で下車、帰宅致しました。

帰ったら直ぐ現在の家内のミスエとの結婚式を挙げました。従兄弟同士で出征中も何かと手伝いに来てくれていたようで、自然な流れでした。結婚式の御樽も、花婿から花嫁に持参するお酒も、配給の酒を集めて間に合わせ、覚えていないが鯛やスルメなどは、なかったかと思えます。帰って四、五日の間でしたから、花嫁さんも当時ダンスも無く、自分の山から杉材を伐って作って貰うような時代でした。

結婚以来六十年、夢中で二人で頑張りました。二男一女をもうけ、一人は兄の家に養子にやり、

国の統計事務所に勤務、長男は私の後を継いで農業、果樹栽培、蜜柑と李^{すもも}等、娘も岡崎の方に嫁ぎ、時には孫の顔を見せに来ます。

近衛兵、山西省和順、山西省坊子の部隊の戦友が毎年日本各地で開催され、ほとんど毎回参加致しました。苦勞話に花が咲きます。戦友の家に泊まったり一緒に名所旧跡を回ったり、戦友の味はまた格別でしたが、戦後六十年、八十歳も半ば過ぎて、戦友会も解散してしまいました。時に戦友会誌、写真を見ながら当時の戦友を偲んでいます。

町内の役職も農業関係の肩書もすべて退き、李の役員を今度交替すると、裸になれます。家内と二人で息子の手伝いをしながら、狭い菜園で季節の野菜を作り、無農薬で虫食いも多いが、皆さんに差し上げて喜んで貰えるのが楽しみです。

幸いにも夫婦共々健康です。女房には随分苦勞を掛け続けたので、これから二人でゆっくり老後を楽しみながら、女房孝行もするつもりです。